

村雲尼公猥下御題字

日蓮宗管長 旭日 苗猥下題字
 顯本法華宗管長 本多日 生猥下序文
 海軍大將 上村彦之丞閣下題字
 田中智學先生序文 文學士 國友日斌先生謹輯

日蓮上人自叙傳

全一冊
 英雄僧日蓮上人の自傳なり、法華宗信徒は固より其教義を研究せらる、諸氏の愛讀を祈る
 ●御曼陀羅 御自筆佐渡國阿佛坊妙宣寺に藏する靈寶をコロク
 ●附錄 法華經勸持品、如來神力品、如說修行抄、年表

洋裝頗美本◎新式ポイント活字◎紙數五百余頁◎特製總皮
 三方金正價壹圓廿錢◎上製天金正價七拾五錢◎郵稅各八錢



佛教の本義

大僧正 本多日 生

西洋には宗教に對して二種の見方がある、一は自然法て一は天啓教と云ふのである、天啓教と云ふのは、神の啓示に依て傳へられたるバイブルそれが宗教で、之れ以外に出ることは出来ないといつて福音的宗教と云ふものを唱導した時代があるが、其反動として自然に真理がある、紙に記されたものでない、何處にも實際的の真理があると云ふので、天啓福音の宗教に反抗して起つたものがありすから、宗教と云ふと何となく形に捕はれたやうに思はれるが、佛教はそんなものではない、佛教と云ふものは到る處宇宙の真理を説明し其宇宙の真相が直ちに教になつて居る、説く所必ず教があれば一面に理がある、教があれば則ちそれを受

ける所の行がある、此處に生きたる宗教がある、それを括つて佛教と云ふ言葉で以て現はして居る、教と云ふ字は示教利喜と云ふ字を纏めて教と云ふのであつて、經文を讀めば示教利喜と云ふことが澤山ある、示すと云ふのは實際實物を指し示すのであつて、宇宙なり衆生なり佛陀に就て斯う云ふ事があると云ふことを示すのが示と云ふ字である、又それに依て教化を得てア、喜ばしい事であると云ふ感嘆措く能はざる有様を教と云ふ字で現はして居る、其實物に就て示すばかりでなく、それに就ての教化、それに就ての實行、それに就ての効果及喜悅と云ふものを纏めて教と云ふ字に使つて居る、又一方からは教と云ふ字は經なりと云ふ

發賣元 取次販賣
 東振東京 市口 神戶 田原 區 錦州 町 武島 丁番 〇六九
 東振東京 市口 神戶 田原 區 錦州 町 武島 丁番 〇六九
 勉統 強堂 書店 團

て、是は知つて居るものが知らぬものに教へてやると云ふことであつて、其教へたことが真理に適ひ、實際に適ふものであるならば經となつて來るのであるが、經典の價直のないものならば經の字は起つて來ない、此の經と云ふ字はどう云ふ譯のものであるかと云ふと佛敎では六塵を以て經と爲すと云ふことを説く、六塵と云ふのは人間の六根の相手になつて居るもので、又六境とも申しますが、是が多く人の精神を擾亂するものであるに依て塵と云ふ字を付けたので、眼は形あるものに對して動き、耳は聲に對して動き、鼻は香に對して動き、舌は味に對して動き、身は觸に對して動き、意は法に對して動くと言ふやうに、此六根六境と云ふものが相對して、此六つがどれでも皆經である、故に此實物も一つの經であり、話しをする所の聲も經ならば、人間の話しをするばかりでなく鳥の啼く聲でも何でも皆經であり、香も經であり、味も經であり、觸れると云ふ事も經であり、法も經であつて、どれにも應用が出来るけれども、人間の六根の方が發達して居ら

ぬければ致方がないから、佛は三塵經と云ふて色聲法の三つだけ取つて、後の香味觸の三つは用ゆるに及ばぬと言つて居られますが、人間は鼻で感化する事は殆んど六ヶ敷いけれども、文殊菩薩などは此真理を現さんが爲に、首楞嚴經の中に御馳走で教化が出来ると言つて居られる、觀世音は字の如く聲で感化するのてあるが、文殊は御馳走でやる、文殊が鐵鉢の中へ御馳走を盛つてサア諸君と云ふやり方、御馳走を食ふと精神が豊滿して精神が向上して行つたと云ふことがあるが、それは氣根が善くなければならぬので、悪いものでは墮落して仕舞ふ、其他佛敎には面白い事を説いてあります、此香と味と觸れると云ふことを除いて聲と色と法とを用ゐた、實物と聲と真理とを應用して教へたのであつて、それを後代に傳ふる爲に書き記された文字が經であるから、之を文字紙墨經と云ふて別にするのであります、紙墨經であつても、此中に自然的の不滅の真理が籠められて居るのである、其籠められてある經文を口に唱へるときには、其聲の中に

實際の力があり真理がある、殊に人類を感化する時には實際の物を持つて來て土瓶茶碗と云はずとも、口で土瓶茶碗と言つた方が能く分る、又如何に實物が能く分ると云つても、精神問題や佛様の問題に佛を引張つて來る譯には行かないから、言論を以て人心を開發して行かなければならぬと云ふので、説教と云ふ事が起つて居る、それには最後には耳根得道と云ふて、耳根尤も銳利と云ふ所で研究が終つて釋迦が説法するのでそれが爲に文珠の説より觀世音の方が偉いことになつて居るのである、それであるから佛敎と云ふものの中には、六塵悉く之を包容し、而して其實際的なる即ち宇宙の實相と云ふもの天地萬有を包含して行く、又それを説かる佛様の智慧を考へると、萬有の動かない方の眞實を觀て御座る實智と、それを働かして行く所の方面の權智と云ふ此二智が圓滿になりまして、それが發して一切の教と云ふものを成して居るので、實際に發達自在なるものである、佛に付て考へますれば、實智と權智と云ふものがある、之を詳しく言へば、四

悉檀と云ふて世界爲人退治第一義の四つてあります、世界とは其社會に於ける時勢の必要に應じて適當なる方法を執つて行くこと、爲人とは其人の智識の程度人格の奈何に依て説いて行くこと、退治とは其人の弊害の側をば之を打碎く、さうして最後に第一義で真理を説くと云ふのであつて、佛敎の運用と云ふものは總て四悉檀の應用に依るのであります、少しも堅苦しいものではない、印度の國には澤山の政治家も學者も出たけれども、釋迦牟尼の勢力の大なることは、印度の國全体よりも釋迦一人の方が大きい、印度ばかりでない東洋の文明に於ても釋迦牟尼の思想上に於ける影響と云ふものは大なるものであつて、今後どうなるか分らない、是が終りては無い末期でない、其處から考へて見ると、佛敎の生きた精神が發達して社會に發動して參ると云ふのは、其總てか佛敎である、而して其佛敎の包容して居る容量と云ふものは非常なもので、天地宇宙の實相と云ふものも、大活動の佛陀も、皆悉く佛敎の容量中に包まれて居る、さらに佛敎は廣大無邊

なるもので、釋迦牟尼が説いた事だけと云ふことは言はぬ、佛教に於ては世法開顯と云ふて、世間に在るものは何でも開顯して仕舞ふ、釋迦が大涅槃經に説いてある蓮華と云ふのはどうであるか、蓮華は泥の中に這入りて居りながら清き花を開く、佛は世を感化して行く方法を蓮華を以て理想として居つて、人生の濁りし中に解脱して行くと言つて居る、決して世間の事と争はない、世間の在來の思想文明に逆らはない、世間と争はないけれども亦世間の爲に汚されない、世間に諷つて曲學阿世として立つて居るのではない、又一も二もなく押し付けて教へると云ふのではない、此汚れの多き迷ひの深き人間に接觸を取つて、さうして之を開發して行く所の働きを爲したのである、故に世と争はず世の爲に汚されざること蓮の如しと言つて居る、佛陀は世間の事を説明しても其中に第一義を了解せしめ淺き事物を捉へても其中に高遠なる理義を諒解せしむることが出来るると云はれて居る、佛陀は日々現はれて來る問題を捉へてそれを解釋したものでありまして、

を知つて居る、佛教は三世十方を貫いた大宗教であつて、今の釋迦牟尼が説いて是だけが佛教であると云ふ様な事は言はれない、昔の傳教大師であるとか日蓮上人とか云ふ不世出の偉人の頭に映じた佛教は、決して狹隘固陋なものでない、あゝ云ふ人々は酸いも甘いも絹漉にして居るのであつて敬服措く能はざるのである、然るに今日の様に小さな眼識で批評するなど、云ふのは地獄の底に眞逆様である、佛教の人生國家に與へた文明そのものが、悉く佛教である、それは佛教の本質そのものがそなたで居るので、こゝに一端を申しますならば、佛法とは實相一妙法吾人衆生佛陀と云ふ三つである、今日如何に進歩した宗教を研究しましても宗教の本旨は此三つを出てゐるのであります、佛教が此天地宇宙を説明致しまする上に於て實に詳しいものでありまして、實相論と縁起論と云ふ二方面がある、實相論と云ふのは如何なるものも總て動かないものとして観る、縁起と云ふのは活動して發生して居る所の有様を観るのである、實相論の方面は暫らく之を

實に巧妙なる譬喩を取つて説明を試みたものであります、それでありましてから法華經の中に、「若説俗間經書治世語言資生產業一皆順正法」とあつて、俗間の經書と云ふのは即ち世間の道德であります、種々の業務も總て佛教である、それ故に世間の道德其他世を治めて居る政治法律人間の生活を助けて居る業務、それが總て我説く所の教と順應し一致して行くのであつて、それが皆佛教である、故に一つの理想信念が極つたならば日々の生活の其處に佛教は籠つて居る、國民各自の職務が佛教である、御經だけが佛教であると云ふことは昔から言つて居ない、それは今擧げた法華經の中に教へてある、そのみならず釋迦は五行と云ふことを説いて居る、五行と云ふのは大涅槃經に説いてある佛の働きであります、聖行天行梵行嬰兒行病行と云ふのでありまして、初めの三つは兎も角、嬰兒行と云ふのは赤兒のやうな行をするのである、それから病行と云ふのは毒を制するに毒を以てすると云ふので、如何に荒くれたものでも之を統御するには統御する途

指き、單簡に縁起論のことを申さば、第一は業感縁起是は凡て人間の迷の仕業が本になつて此宇宙は起り變化して居る所のものであると言ふので、人間の惑業と迷を起點として宇宙を説明するのである、次に賴耶縁起、之は宇宙間の大我であります、未だ缺けたる所がありますので、眞如縁起が現はれる、之は水の如く波の如く、波即水、水即波、こんなことは日本人は皆知つて居らんければならぬ、之等を一括して無明縁起と申しますが、即ち迷を起點にして説明するからである、惑業は迷である、賴耶縁起と云ふのも迷である、賴耶から直ちに佛になつて來たと云ふのでなく、先づ小我になつてそれから佛になると云ふのであるから無明縁起である、眞如も亦波濤が立つと云ふのも皆速が波を立てるのであるから是も無明縁起であると云ふやうに、皆迷から起點を發して居るのであります、所が是以上の一つ説が現はれて居りますが、それを法性縁起と云ふ、之は宇宙の善い方面即ち光りの方面が現はれて、それが色々になつて一切を支配する、丁度

日本に神様があつて、其神様から皇室があつて、それに國民が集まりて来て世界を支配すると云ふやうなもので、之を法性縁起と申します、法性と云ふとただ完全でありませぬから、丁度天之御中主神は人格でないのが、天照大御神に至つて嚴然たる人格があつて、萬世不朽の皇統を垂れ給ひしと同じやうな大人格の佛陀が現はれて来て衆生を濟度する、即ち此三界は皆是れ我有なり、其中の衆生は悉く是れ吾子なり、而かも今此の處は諸の患難多し、唯だ我一人のみ能く之を救ひ護ると云ふやうな思想になつて現はれて来る、是が即ち佛界縁起でありませぬ、斯う云ふ工合にして宇宙縁起の有様を説明して行つたものでありませぬ、眞に高遠微妙のものである、さうして吾々自己を説明する上に於ても、實相縁起が分れば又從つて了解するを得るので惡業縁起の上より吾々は惡業に依つて苦しい身である、と云ふやうに説いて、先づ自己の缺陷を意識するやうに説いたものであるが、進んで佛性と云ふものが存在することを教へ、佛性と云ふのは備へべきもので

之を行佛性とも云ひ、此の行佛性が目を覺まして活動する之を菩薩とも佛教徒とも言ふのである、大涅槃經に闇黒と光明と寶珠とに譬へまして、幾ら闇と云ふものを掻き除かうとしても除くことは出来ないから光を點じやう、光を點じては何にも無くては仕方がないから其中にある玉を取出さう、斯う云ふ工合に説明をして行つたものである、之を今の宗教の方で申しますれば、吾人には缺點があるからどうしても解脱しなければならぬ、解脱を要すると云ふことが起る、佛性があると云ふ事は即ち解脱の能ありと云ふこととて、唯だ能ありてはいけませぬから解脱は定まれりと云ふので吾々は解脱しなければならぬ、解脱し得る、解脱することが定まつたと云ふ所に至つて眞に活動が起る、唯だ解脱を要すると云ふのではいけない、成らうとすれば成れる、それぢやと奮發すれば行ける、行けるから活動すると云ふやうに進んで行くのが佛性の行法で、之を離すことは出来ない、凡そ教の性質は向上しなければならぬ、向上し得る、向上するに定まつて居ると

云ふ三方面であつて、さうして佛陀の生活に進んで行く、佛陀に就てはいろいろ研究法式はあるが、現身と法身とがありまして、現身と云ふのは印度に現はれた釋迦である、それを押し擴げて見ると、不滅の佛であつて現れの佛のみでない、其後ろに非常に大きなものがある、と云ふことを考へて、之を現身法身不二と云ふのであるが、之が亦非常に進歩した思想であります、此思想の上から考へれば釋迦には理智と云ふ三面がある、釋迦の心なり身体なりの上に大智慧があり大悲がある、此智慧が實と權とに亘り、此慈悲が世間と出世間とに分るゝのであつて、此處に大智慧大慈悲が凝つて大化導と云ふものが起つて来るのであります、そこで此智慧と權智とが現はれて万世不易の教があり世間には社會事業もあれば道德もあれば經濟もある、此二つを完ふせんがために釋迦牟尼は出現したと云ふことを説いて居るのでありますので、法華經の中には心も能く之を言ひ現はして居る、神力品には救世者と云ひ、觀音經には能救世間苦と言ふて居る、又之を

合せて説く場合には世間の樂及涅槃の樂を與へんが爲に来れりと言ふて居る、故に佛敎の中には社會事業が詳しく説いてある、そこで一言にして佛陀の目的を言ひ現せば、所謂衆生濟度である、法華經には爲度衆生故と申して、此の生きとし生ける物を濟度しやうと云ふのが即ち釋迦出現の目的である、佛敎とはそれである、故に佛敎とは慈悲なりとも言ふのであつて、慈心を以て世に遊び給ふとある、雲の上に引込んで居ないで實世間に出て來つて之を救ふのである、之を救ひ之を教ゆるには千變万化して大變な意味を爲して居る「無量義者從一法一生」と云つて、之を開けば實に無限の教を生じて來るのであります、さうして其大事な點は衆生と佛との關係にある、佛は何時でも吾人を愛し教はうと云ふ慈悲が吾人の精神の上に懸つて居つて、此方で厭だと云ふので逃げて居つても悲觀して居つても、丁度親が子供を愛するが如き精神が常に現はれて居る、又吾人の方には向上せんとする佛性があつて、此の佛性と佛陀の慈悲とが合致する、其處に道德

が起り人間活動の源泉が流れて来るのであつて、即ち信念が起つて来る、信は道の源功徳の母である、それが一切の道徳を發生して来る所の力となるもので、要するに、宇宙を説明し、個人を説明し、佛陀を説明し、實際を説明し、精神の關係を説明し、之を信仰に求めてさうして美しき事業を産出して来ると云ふことを佛敎は教として居る所のものである。此の善行に努力して行くそれが菩薩行である、菩薩行と云ふのは自分自身の向上する觀念は無論の事、總てのものを向上せしめんとする所の大精神である、菩薩と云ふのは上に絶對の道を求め、下に迷へる衆生を救はんとする決心を起して修行をして居るものを言ふので、無量義經には來至住と云ふことを説いて居る、佛敎の教は佛の慈悲から發生するものであつて吾人の發心に至り、さうして菩薩行の所に止まるものであると言つて居る菩薩行とはカン／＼鐘を叩いて御經を讀んで居ることを言ふのではない、そんな貧弱なものではない、この意義を明かして行くと、衣座室と云ふことが説いてある

即ち如來の衣を着如來の座に坐し如來の室に入ると云ふことであるが、佛様の室に入れと言つても、何處かへ行つて開帳して貰つて佛壇の中に入ると云ふのではない、そんな處に入るのではない、如來の室とは汝等の心に慈悲の發する時をこそが如來の室であると言つてある、吾々の持つて居る心に慈悲仁愛の精神が發動すれば茲に佛の室が出来て、佛と同じ處に居ることが出来る、如來の衣は忍辱と云ふ事である、如來の座とは一切法空是なりて、公平無私のことである、即ち平等の精神である、眞の思想、善美を愛する思想、道を愛する思想、人を救はんとする精神、一點の私曲なき所の精神が如來の座である、汝等法を説かんとする時には必ず中心に慈悲があるであらう、中心に慈悲があれば是が如來の室であつて、汝等慈悲心を尊重せなければならぬ、汝等が如何なる衣を着けても忍辱の心が起らなければ如來の衣ではない、汝等に一點私ない精神にならなければ其演壇は何にもならぬぞと云ふことを説かれてあるので、之を極めて單簡に申せば、不放

逸と言つて居る、懶けて居てはならぬ、釋迦牟尼は法華經を説き終り最後に涅槃せんとした時に於て、汝等懶け根性が起つたならば佛敎は滅びる、夢息てはならぬと云ふことを以て袂別の言葉として居られますので、佛敎を信するものゝ忘るべからざる教訓である、故に昔しの高僧碩徳は此の言葉に従つて道を勵んだのであります、日蓮上人は其一人でありまして、上人は佛門に入りまして以來、如何に熱心に研鑽を積みましたが、上人は熱誠を以て前後十六年の勉學を致しまして、さうして學成り志定まる時に於て、奮闘の巷に出でたる時はどうでありましたようか、鎌倉の大街小街の辻に立つて、雨が降らうか風が降るか、迫害雨の如く降り来りても、少しも屈せず意氣益々天を衝いたる有様は、いかやうな儒夫であらうとも感憤せぬものはありませぬ、上人の意氣に感憤する、上人の精神は今現に活躍して居る、日蓮上人の教はそこである人は口に法華經を讀めども心に讀まず、心に讀めども身に讀まず、日蓮は色心二法に弘通したと言つて居る

釋迦牟尼の教に感憤したる一漁師の子供が、あゝ云ふ偉大なる人格を得たのは是れが佛敎の感化行法である故にこの佛敎によりて個人の上と我邦の文明とを圖りて行くのが大事ではあるが、佛敎に感憤興起して之を守り之を發揮して行くものがなければならぬ、日本の國民はこの偉大にして且つ我國に大貢獻をなせし教に對して之を見捨て、行くやうな忘恩的の國民ではありませぬ、今までは氣が付かなかつたけれども、佛敎の健全なる方面とさうして日本の思潮文明に調和して進めて行くと云ふことは、苟くも少しく國を思ふの人は考へられる、それが考へられぬやうな人は低能者である、人はあらゆる方面から苦痛を感じ刺戟を與へらるゝものであるから、どうしても強き信念に依りて慰めある法悦に住み、安心立命の力に依つて苦みは苦みと悟り、樂みは樂みとして南無妙法蓮華經と云ふやうに、人生生活の中に宗教の趣味を入れて行かなければ疴癢の起る神經を抑へることが出来ぬ、この甚深の本義を辨て將來の天地を開拓せなければなりません



身退けば名進む

海軍少將 佐藤 鐵太郎

己の好む事

併し御婦人といふものはどういふものか、虚榮心が深いものであるといふ事でありすが、これは是非もない事で、男子の致す事は積極的でありすが、萬事ハレバレ致して居りますが、御婦人の致す事はどうしても消極的方面でありすが、外にも顯はれさせぬ、従て何となく外に顯はるゝことを欣ぶのてありません、これは必ずしも適當な觀察でもないかも知れませぬか、世間一般に大きく働くといふ事が少いので、自然の結果自個中心の考が起さる、自個中心の思想が煩惱ともなり嫉妬ともなり、場合によつては自奪ともなるのは自然の勢でありすが我日本國では犠牲心の涵養に力めて來たのでありますから、酷い事にならずに淑な美風を養を得たのであります

海軍少將 佐藤 鐵太郎
 御去佛教でも儒教でも女人の位地を認めては居らぬのであります、釋迦如來の御本意は法華經にありませぬ如く、決して女人を疎外するのてはありませぬが、其の婦人の身として好からぬと仰せられて居ります、いくら口元がよいと申しても唇をとつたならどうだ、いくら眼が可愛といふても扶てしまへば恐しいかたちとなるのである、皮一枚丈けが女の美さで淺間しいものである、女の美しいといふのは心の清らかなことであるといふて訓へて居られますが、孔子もまた女子と小人とは養ひ難しといふて居られます、併して、考なければならぬ事は、養ひ難しといふので、元來悪いもの下ある養ひ得ずといふのではない、養ひ難いから到底駄目だといふてあきらむべきものではない

元來御女性は男の柱に對する術でありまして丁度松と蔓の様な者であります、松は如何にも男らしく直立して居りますのに、蔓はそれにより添ふて美しく繁茂するのでありますから、どうしても眞直ではないわね〜と繁らなければならぬので、一寸誤るとひねくれる事になるのでありますから、こゝが余程注意を要するので、養ひ難い點もまたこゝにあるのであります、併し女子は大切なものであります、世の中に小人はなくとも宜しいが、女子がなくては太變てあります、どうしても見捨るべきものではありませぬに注意に注意を加へ、御女性の美點たる如何にも美しくしほらしく、藤の蔓の捲々たる大木にからむ様になよやかに生長するといふ特性を維持しつゝ立派なものにしなければならぬが、心一つの向け處で恐るべきことなるのであります

御事申したなら御怒りを受けるかも知れませんが、兎角女性の性質としてヒネクレル氣味がどうし〜もありますから、美しい曲線になる様に養ふ

のが大切であります、もしも一步を誤りますると非常に厄介なものになりますので、殆んど手のつけ様もないことになるのであります、玉耶經と申す御經に、玉耶といふ美人が其夫を敬せず其姑舅をなみするので、其の舅と姑とかどうか御説諭を願ひ度といふて釋尊に御願致したので、釋尊が説法をなされたと云ふ御經てありますが、釋尊が澤山の御弟子を御連れになつて説法に御出でになると、玉耶は非常に畏れ一室に匿れて出て來ぬのであります、釋尊が神通力を以て部屋部屋の壁を硝子の如く透き通る様に致し出したので玉耶もとう〜佛前に拜伏したのであります、そこで色々御説教がありました、其御説教の内に婦に七通りの區別がある、第一を母の如き妻、第二を妹の如き妻、第三を善知識の如き妻、第四を妻の如き妻、第五を婢の如き妻、第六を怨家の如き妻、第七を奪命の如き妻といふのである、母の如き妻とは慈母か子を愛するが如く身にかえて愛護するのである、妹の如き妻とは兄を敬するが如く夫を敬し常に其の命に服従して居

るのである、善知識の如き妻は常に夫を佑けて、誤なからしめつゝ、佑けるのである、妻の如き妻はあたり前の妻である、婢の如き妻とは夫を敬すること主君の如く、たゞ／＼夫の命に従ひ何事も自放せず夫の爲に身を惜まずに勉めるのである、怨家の如き妻とは例へば夫の身を愛護するの念なく、たゞ／＼争鬭に朝夕を過しどうかして離縁をしたいといふて居る様な關係で少しも身をつゝしせず夫家の不名譽を顧みず、どうかして離縁をしたいと思ふは勿論のこと、場合によつては夫の命をも縮めんとするか如き大惡心を以て夫に對するのである、ソコデ玉耶御前はどの妻になる積りであるかと釋尊が御尋になり文す、スルと玉耶はタゞモウ慚愧に慚愧を加へ、夢のさめたる様になつて、世尊私は婢の如き妻になりまるといふて誓をたてたといふ事が玉耶經にあります、婢の如き妻といふのは誠に尊ひのであります、母の如き妻は愛はあるが敬ふ心が足りませぬ、妹の如き妻は、敬はあるがいくら我が儘の念を起さずには居りませぬ、善知識の如き妻は

動もすれば御髻の下に布んとする恐かあります、妻の如き妻は心得としては上乗てありませうが、出色の點がありませぬ、婢の如き妻に至ては夫を敬すること主人の如く、而かも其の身を慎むこと謹慎でありまするるので、如何にも床しひのであります、自分が主人の如く夫を敬するのは決して身を下婢の列に下すのではありませぬ、妻としては儼然たる妻であるが、下婢が主人に對する如きへり下りたる心を以て夫に仕るといふのは、如何にも床しひので賢婦人の名は期せずして至るであらうと信ずるのであります、これ等も則身退名進といふ點でならなければなりませぬ

どうも餘り長くなりまして恐縮てあります、が、こゝに一ツ御別れの言葉として一言を申して置きますそれは家内とは何と書くといふ事であります、如何にも消極的な因循な様ではあります、が、男女各其處を得て天地の間に御奉公致しまするには、どうしても分業でなければいけません、どうしても家庭を作るのが第一の目的でなければなりません、人によりまして

は女子の獨立生活を説く人もあります、コレハ不巳場合の事て、決して唱道すべき事ではありませぬ、萬一の爲に獨立し得る資格を備へることは宜しひのであります、これを以て婦道の槩とする譯にはどうしてもなりませぬ、矢張男は外に出て、御奉公に心と身を委ね、家の事など考へずに奮進しなければなりませぬから、女の方でよく家庭を整へ夫をして後顧の患なからしむるのが何よりも大切であります、夫は外の事に盡瘁して居るに、婦もまた家を外にして奔走し廻るといふ事では、夫の身として安心の出来るものではありませぬ、私は軍人であります、從軍中の何よりの安心は自分の妻か何の心配もなく家事を整へ子供を養ふて居て呉れるといふ點にあるのであります、生死の界にありまると此の關係が特に切實に感ずるのであります、こゝうゆう處でこゝうゆう事を申しては如何かと存じます、從軍中留守を預る妻が國家の爲とはいひながら軍隊の送り迎へをしたり特志看護婦となつたり致して、家を外に奔走するなどは從軍者の身にとり好

感と與へるものてはありませぬ、たゞ／＼一身をさへげて後顧の憂なからしむるに注意して呉ると思ふ程安心なことはないのであります、特志看護婦も悪いとは申せませんが、醫者の身になりまると身分のある方の看護婦は反て困るといふ事であります

物は觀察により異ひます、婦人が社會の事業に對して色々骨を折るのは、決して悪い事ではあります、が、何に致せ、家庭を圓滿に維持するのが大切で、こゝうゆう事の出来ない人々が男子と同様に職業なり事務なりに關係すべきもので全體の原則としては矢張良妻となり賢母とならなければなるまいと思ふのであります、何は兎もあれ、西洋の道徳は個人の幸福を根本として、御互に個人の幸福を害せず個人の幸福を進むるといふのが道徳の基礎となつて居るが如く見へまするが、我日本の道徳は犧牲主義を根本とし、夫に對しては身を以て夫の不幸に代らんとし、國に對しては君の爲に身を捨て、自身幸福を顧みずといふ點にありまする、此點さへ注意すれば立派なことになるて

思ふ

(12) 西人 (13) 西人

あらうと思ひます、日蓮上人も仰られました如く、彼の國によりし法なれば此國にもよかるべしと思ふべからずでありまするので、此邊は御互に注意を加へて、生半著の事にならざる様致さなければなるまいと思ひます、どちらも前後不揃で誠は濟みませんが、今日は何れも御免を蒙ります、どうぞ身退けは名進ひの真意義を御服膺になり、日低ければ寛高しと同様に御記臆に頼とめ置けなすする様御願致しする次第であります

カレンとくも社よりひや

* * * * *

我が門家は夜は眠りを斷じ晝は暇を止めて之を案ぜよ。一生空しく過して萬歳悔ゆる勿れ(續遺文千三百十 頁富木殿御書)



淨徳夫人に就て

（日本婦人の家なきが）
（七月六日地明會に於ける講演の大意也）
（講師の校閲を經ず文責を記者 白碧生）

日蓮上人の御書

亦早急なる

子爵 五 島 盛 光

の設備に就ては大に力を用ひなければならぬ、實に驚くべきほど缺陷が起つて居るのであります、人口は殖える、生活は意の如くならぬ、時流は虚榮を生んで華美を競ふ有様であるので、婦人が淨徳夫人の如き清新なる修養を積むならば、其缺陷を補ふて品性を高むることが出来ると思はれる、元來婦人は一面には中々の勢力がある、兼好法師の徒然草にある通り種々の變化がある、故に善良なる方面に向上致しをしますと、其家庭に及ぼすのみでない、他に接する上にも重大なる功果があるのは勿論である、今の社會には堂々たる男子にも信仰が薄い、京都の勝本博士の話に、世の中が進

海上より

△七月二十六日(セーロン)海海上に在る不誌讀者岩澤理八氏より、記者に送られたる書簡なるも、日蓮主義がいかに海上生活のために力あるかを立証するものなるかと思ひ、敢てこゝにかゝる(白碧生)
△自分の乗りて居る船は外國の會社へ二ヶ年間貸すことになつた、航海は外國の航路で二ヶ年間は内地の港灣へは着かない、船は油の輸送で普通商船の出入する港へは碇泊しない(コロンボ)から(マシヤ)灣内の(アバタン)(巨港三三〇里)に航行して居る、(アラビヤ)と(ペルシヤ)の國境の河を五十海里ばかり上りた所など船が停する時は、内地の暑さとは違つて海水の温度が八十度以上もある位で、風でもなかつたら一寸苦しからうが、印度人でも西洋人でも居る所であるから、百度であらうと耐へられない筈がない、日蓮上人を大模範として吾が心に鞭打たば、何とも云へぬ悦びの感想が湧いて心氣爽快たるを覺ゆ、船内では日蓮上人敬仰者多く題目の聲は盛んなものである、吾々船員には最も強き力を與へらるゝ様に感じられる、家庭の如き船内生活の中に日蓮上人の活動的信仰の熱火が燃えて居るならば、其船の航海が安全であるのみでなく、日本人の體面を昂げることになる、今故山の風土に接して居らないけれども一人の偉大なる日蓮上人によりて吾が心は愉快に充ちて居る、餘暇には御遺文を拜讀して吾が心を養ひ嚴格に近づき、また出来得る限り各地の風俗や宗教の事も調べようと思つて居る、其上にまた報ずることしよう、折角の爲に健在を祈る

妙莊嚴王品と申すは殊に御爲に用事也、妻が夫をすゝめたる品也末代に及んても女房の男をすゝめんは名こそかはりたりとも功德は但淨徳夫人の如し、いはんや此は女房も男も共に御信用あり、鳥の二の羽をなはり車の二つの輪かゝれり何事か成ぜざるべき天あり地あり日あり月あり、日てり雨ふる功德の草木花ささ果なるべし(品々供養抄) 此の聖文に示されてあります通り、婦人の修養には尤も尊とき經文でありますが、亦一般の方にも何等かの参考になるものと思ふ、私は平素救濟事業の問題を調査して居るものであります、不良少年や育兒上

此の聖文に示されてあります通り、婦人の修養には尤も尊とき經文でありますが、亦一般の方にも何等かの参考になるものと思ふ、私は平素救濟事業の問題を調査して居るものであります、不良少年や育兒上

歩すると宗教などは不必要であると云ふて居る、而し如何に人間の智識が進んでも吾人は凡夫であつて社會的問題の爲に動搖を受ける、どうしても背後に偉大な存在がなければ力強くない、昔は銘々の家庭に種々信仰上の話があつた、その信仰が正しく整ふたものになりにしても、先づ悪い事をすれば神様の罰が當ると云ひ、井戸の附近では不潔なものを洗つてはならぬと云ふ様な事や、又行儀作法の上でも、人の前で鼻をかんだりクシヤミをする折などには、横を向いてすべきこと位は心得て居つた、今日では人の前で遠慮もなく何でもやる、誠に不行儀なものである、智識や法律制度の方面は進んだが昔しの奥床しい點は漸次亡くなつて、種々の弊害が起つて來た、現代の家庭を見るといかにも落莫たるもので、しとやかな美しい風がなくなつて來た、従つて家庭の中より不良の少年が出ることになる、不良少年の如きは確かに家庭の感化に由るのである、此の種の少年は中流以上に多いのであるが、家庭に於て少年の教育に注意を缺き重きを置か

ないのに基因する、我國では婦人は全力を擧げて内助の事に致すべきであるが、夫婦共に外に勤めて内助の努めを致さんものがある、それ故に一所に晚餐を共にする機會だも少ない、従つて少年の生活上規律なく自墮落になる、御婦人は内部の一切に氣を付けて夫を充分に働かすのが大事である、殊に子供の將來に氣を付けて曲つた考への起らぬ様に教養して行かねばならぬ是は婦人自身の天來の仕事である、然るに此頃は、男女同權なんと云ふ權利を主張するものが出て來たが、家庭の主人が一人でないことになる譯で甚だ困る、婦人は婦人らしい態度で夫の功績が擧げらるゝ様に心懸けるのが尊いので、そこに内助の力がある、飛上りの女は壓伏せられて居るから偉磊事が出来ない、自由に動ける様にならねばならぬと言つて居る、けれども聞く所によると、外交官の夫人が唯だ女學校を卒業したばかりの人よりは、從來の習慣や禮儀などの事を知つて居る方が信用を得ると云ふ事である、日本の婦人が少し位外國語を覺へたからとて得意がつて居るの

家、夫、女、子、の、衣、装、に、関、心、を、持、つ、て、居、る、人、は、多、く、無、意、味、な、も、の、で、十、數、年、前、カ、イ、ゼ、ル、舞、が、流、行、し、て、居、つ、た、が、此、頃、は、短、か、く、刈、る、様、に、な、つ、た、彼、の、徳、川、家、康、が、髻、を、剃、る、と、諸、侯、が、髻、を、生、や、さ、な、い、併、し、流、行、は、一、時、に、起、つ、て、直、ぐ、消、え、る、の、も、あ、る、が、問、題、に、依、つ、て、は、感、化、の、影、響、を、與、へ、る、感、化、と、云、ふ、も、の、は、恐、ろ、し、い、も、の、で、あ、る、感、化、の、如、何、に、よ、り、て、功、果、が、異、つ、て、來、る、昔、し、は、徳、化、と、か、教、化、と、か、云、つ、て、居、つ、た、獨、り、大、き、な、關、係、に、限、る、も、の、で、な、く、家、庭、に、於、て、は、最、も、深、き、關、係、

は、日本の體面にもかゝはる、寧ろ日本の事を知つて居るのが良いと云ふ事である、我國の婦人の現狀は正しく此時機である、外國から千百の思想と流行とが這入りて來るが必ずしも善いことのみでない、悪い事も流行して居る、一體流行に就ては考へねばならぬ、此數年間婦人の衣裳などは元祿と云ふのが流行る、而し元祿と云ふのは新しいのではない、二百年前の事であつて之が眞似をして居るのである、婦人でも新しいと云ふことを言つて、新發明の様に騒いで居るが、新しい古いと云ふても良い事は何時迄経つても變るものではない、流行とは多く無意味なもので、十數年前カイゼル舞が流行して居つたが、此頃は短かく刈る様になつた、彼の徳川家康が髻を剃ると諸侯が髻を生やさないと併し流行は一時に起つて直ぐ消えるのもあるが、問題に依つては感化の影響を與へる、感化と云ふものは恐ろしいものである、感化の如何によりて功果が異つて來る、昔しは徳化とか教化とか云つて居つた、獨り大きな關係に限るものでなく、家庭に於ては最も深き關係

がある、或る小學校の生徒に、煙管と云ふ作文の題を出した所が、煙管とは金を以て作り時々人を打つものなりと書いたと云ふ事である、それは其生徒の家庭に於て煙管を以て打つ場合があるからであらう、感化に依りて子供は心理状態が變はる、子供の時には氣が付かぬ様でも自然にそうなつて來る、子供は人の眞似をする動物性を持つて居る、故に子供のものは氣を付けることが大事である、家庭に於ける思想上の顯現が正しくないと充分なる教養が出来ぬ、子供は學校で教へられて居るが、權威ある宗教の力がない、殆んど宗教的思想に觸れて居らぬ、都の教員は其職に對して腰掛風である、殊に女教員は家庭を作りて居る人ならば結構であるが、大抵は嫁に行かない人である、それだから何處かに足りない處がある、學校の先生のみは信頼して置くと良くない、家庭の子供は父兄が氣を付けなければならぬ、また世の中が進んで來ると、娯樂機關が完備する、東京の如き場所では實に困る、淺草の活動寫眞が盛んであるけれども、善いことより惡

三、娯樂の完備と主婦の困る

るい事が多い、それで善いも悪いも構はずに親が付いて一所に這入る、何でも真面目なものは喜ばない、奇抜なもの喜び、目の前を喜ばせるものをやんやと云つて嬉しがらる、子供は泣いて厭がつても親は平気で見て居る、子供に見せてならぬ筋書のもつても知らぬ風をして親で居る、そう云ふ様では子供の將來が可愛想でならぬ、家庭には其母となるものが細心の注意を加へて貰ひたい、如何に智識が進んでも床しい處がなければ駄目である、一例ではあるが、東京市の經營に係る玉姫町の共同長屋には種々の人が住んで居る、其内に主人が毎日外に勞働して妻君は内職をして居る家庭がある、そして其妻君は内職しながら子供の稽古を見てやつて居る、其生活の低度は高くないけれども、キナンと家庭を守りて子供の教養にも心を用へて居る、いかにも氣持のよい温か味がある、同じ長屋に女學校卒業生の妻君がある、中々理屈を言つて家賃を拂はぬと云ふ事である、何の爲に教育を受けたのであるかそれでは困る、そう云ふ不心得では必ず虚榮に陥る、

四 西力老實と家康の用意

一時の慾望に促はれて流行を遂げようとする、經濟の上からも苦しくなる、遂には人に指彈せらるゝやうな醜態を演ずるに至るのであります、
元來日本の財政は樂でない、輸入が多くて輸出が少くない、戰爭で一等國にはなつたが國債の償還が出来ぬ間は弱味がある、國力充實して居るならばビクビクするに及ばぬ、平和の戰爭が續いて居る、六百年前の蒙古襲來と形式は異ふがそう云ふ趨勢の様にあつても現代の人心はどうであるか、懶け根性で不眞面な僅かなことをクヨクヨして居る、さうして家庭の生計が膨張して居る、無理算段をして生活して居る、女は華美に流れる、所謂流行の衣裳に多額の金を消費する、日本人は着物でも洋服和服コートと云ふ工合で筆當が幾つも要る、外國では洋服一つである、それは物價は安い、英國では牛乳一台一錢であるが日本では一合四錢から七錢である、色々の關係から物價が上りて居る、外國人は横濱が高いと云ふので香港に本店を持つて居ると云ふことである、私は日本で産出する品物を用へ

て輸入を防ぐこととせねばなるまいとおもふ、我國には悪い習慣がある、則ち舶來品を喜ぶ風がある、之は國力發展上憂ふべき事である、我國では品物は安く出来るのであるから、多くの需要があれば價格は安くなる、ノールウエーなどは酒舖雜貨店で、國旗中にある王冠の商號を掲げて自國の製品たることを示して居る、而して自國の製品を購買すると云ふ氣風を養ふて居るので、之は對外國係上注意すべき問題ではあるが、其位の考を持たねばならぬ、家庭のものが自國の製造品で間に合ふものはそれで済まして置く、そう云ふ立場に於て外國の善いことを包容し採擇する、斯くの如くして進まば發展の實を見るべきは明かである、明治天皇の御製を拜しますれば

善きを取り惡しきを捨て、外つ國に

おとらぬ國になすよしもかな

と仰せられてありますが、悪い事は力を極めて排斥すると共に善い事は採用し同化するに努むるがよい、この頃は個人主義の毒に中てられて公共的道德心を缺く

心は心と女よりの思ふ改定

ものが多い、西洋の或國では電車の車掌は居ないても二錢銅貨を函に入れて貨錢を拂つて行く、東京の電車では五圓紙幣を出して釣錢を呉れと云ふ客がある、釣錢がないと云へばそれは仕方がないと云つて只乗りをする、神田の大火の時でも水道の栓から水が出て居るけれども、誰れも止めるものがない、外國人は公共の事を考へて居る、善い事は眞似て悪い事は眞似ぬのがよい、日本人は少なくとも個々銘々が自覺より起つて努力しなければならぬ、口先詐りてはいけない、浮々しては居られぬ、忠實に其人の爲すべき仕事を努め家庭を充實にすることが最も肝要である、さうして其の家庭の中心に信仰を置く、さうなると不良少年も少なく犯罪人も減る、英國では一萬二千の四人であるが日本には七萬の四人が居る、従つて多額の國費を支拂つて居る、人は生れながら悪いものはない、家庭の教育習慣が悪いからである、貧乏でなくとも悪くなる、精神の修養が足りないのと悪くなるのであります、之は決して男のみに限るものでない、女もさうである、女

は虚榮が劇しい、所有權の觀念が薄い、唯だ本能の動くまゝに時流を逐ふて生活するものは、不良少女になる、東京の職業紹介所に就て調べて見ると、女の墮落するものが非常に多いので、人の妻となりて節操を賣つて居る、男の方も悪いのであらうが、精神を訓練せぬ女は恐ろしいものである、女優志願者が満員で衝動生活に浮身を賣し、中々に惡風潮を作りて毒を流して居る、之は全く薄ッぺらな虚榮に捉はれて居るからであらう、斯の如きは家庭に教育の中心がないから思想洗練の力を缺いて居るのに基因すると謂はねばならぬ、家庭には婦人が活きた信仰を持つて妙莊嚴王の如く自分の夫を感化し子供を教育して行く様に致したい、日本には精神病者が多い、精神を鍛練せぬから煩悶懊惱して病者となる、信仰修養を積まば治る、宗教上の感應によりて佛様の力を得るならば何でもない、同じ人間同志でやい／＼言つたからとて何にもならぬ自分の至精神が籠つて居ればそこに感應がある、私のかてない、日蓮上人を信仰し佛敎を信仰する力の中に

日誌の中より

(白碧生)

▲現代の思潮いかに推移の激しいものではないか、きの頃は客観描寫とか何とか言つて騒いだかと思へば、けふは早や生命の主觀的要求に走る、無造作に輸入される、歐米の思想を追かけて、定めもなき潮流とその運命を共にして居るのもあまりに情けない、思想の潮流は流れ流れて洋々たる大海に注ぐのてはあるが、この岸やかなたの關を決開し去つたあとで、之はしまつたとは意氣地がなさ過ぎる、こゝに中心を立て、寄せ来る潮流を偃さ止むる、中心確立せば包容同化の作用行はる、従て調整し統一することが出来る譯になるあはて、追かけて没頭して眼が暈むこともなくなるであらう

▲東京の電通を一過すると、何が一番眼に着くかと云へば、時計屋と玩具屋と周旋屋の多いことである、時計店の多いのは結構ではあるが、時間を尊重するのは甚だ少ない、日本の子供は玩具が好きである、新

は大なる感應がある、日蓮主義は立正安國の大主義であるから廣大にして靈妙であります、信仰は説明や理屈では出来ぬ、此の大主義を日常の行爲の上に表はして働く、假し逆境に在りても上人の大活動を考へて信仰を勵んで行くそこに妙味がある、必ず利益がある、信仰に依りて感應があると云ふ事を自覺した以上は自分で解るのである、世の中には信仰は必要である、けれども多忙なので信仰が出来ぬと云ふものがある、而しいかなる人でも働かざるしてはあまい、少しは暇はある、出来ない筈がない、信仰に進むと背後に大きな力を戴いて居るから、心底より難有味に感孚して奮發して勤める、斯うなると靈氣が充實する、人格は向上する、家庭の根本中心が定まるから一家は平和に治まる、男は男、女は女らしく、各其職分自轉を發揮して法悦に充ちた生活を送ることが出来る、願はくば婦人の方は淨徳夫人の如き修養を積まざる様切望する次第であります

らしいもの珍らしいものを買ふ、玩具屋の前へ行くと素際りが出来ない、買へば直ぐ壞はして又買ふと云ふ風であるが、之は兒童心理の啓發上考ふべき大事な問題だと思ふ、強請すれば欲望を達し得られると云ふ、この三ツ子の魂、親たるものは考へて置かねばなるまい周旋屋の多いのには驚く、雷門より上野須田町より淺草橋と一過すると百軒もある、何を紹介して生活をして居るかはこゝに言ふ必要もないが、何しろ職業に就けないで困りて居るものが多いことは事實である、労働政策問題はいつまで経つても解決が付かない、この末はどうなるであらうか、思想家は研究を要する、▲人と云ふものは妙なものだ、自分は現在のこの身に三十三年の星霜を送つたのであるが、これぞと言つて歴史に記録すべきほどの事はない、強いて之を探り出だせば、十五年の昔、神田で二枚五厘の新聞を賣つたこと、築地で牛乳配達をやつたばかり、食客の味を少しおぼえたまでである、けれども自から働いて自から能く書物を読んだことは、今の自分には模範とす

るに足る位で、こういふことを考へると、今の自分は過去の自分よりもつぎらなくなつたのではあるまいか今の自分は久遠の靈光に照されて居るといふことは意識して居るが、過去に牛乳屋の半天に袴を着けて日本大學の校門を潜つた時には、思想生活の一路に突進して居つたので、複雑多様な物的生活を考へることはなかつた、このごろの自分はなぜ眼前の問題に力瘤を入れるのであらうか、過去をふり返ると何だか恥かしい様な気がしてならぬ、之も現在の自覺であるといへばいへよう、偉大なる知見が吾が小菩提心にはげみを與ふる響であらうと云へば云へよう、何はさてこの感、わが胸を衝いて千萬無量なるを覺ゆ

本化記者團の過去

闊浮統一の旗押し立て、文書傳道に努めて居る同志が、統一閣の樓上に相會して食ひ盡し飲みほすてう會なるものを設けたのは、去年七月初旬であつた、爾來一周年、この短かくない時間に何等目覺しい仕事もせ

日蓮主義と生活の意義

三 上 義 徹

人はパンのみにて生くべきものにあらずとは、豈に基督を待て知るべき道理でない、吾人の生涯は僅かに五十年のタイムに過ぎないけれども、この一身が過去に亘り將來に關係を有つて居るもので、現在のこの生活に於て生命を終るべきものでない、吾人は宇宙の一員として其實相を發現し、國家の一員として其理想天業に賛與するの光榮を擔ふものである、一時的瞬間的の物欲に支配せられて永久の生命を亡ぼすことがありては、永劫に浮ぶ瀬がない破目になる、豈に慎しむべきことではないか、男子世に立つ、何等か意義ある印象を貼すものなくんば所謂醉生夢死の嘲笑のうちには葬り去らるゝのみ、法華經の中に

咄哉丈夫、何爲二衣食、乃至如是、

と説かれて居るが、世を擧げて皆然らざるはなして、

ずに終つた、爲せば出来る、腕はある、けれども敢て天下の耳目を聳動せしむる底の事業をしなかつた、唯だ僅かに毎月一回各社の所在地を廻りて講演會を開いたのと、理屈つばい同志の顔が晚餐會の席に並んだに過ぎない、かゝる一年間、けれども本團自體は少しも無意義ではなかつた、この集りがあつたそのために、このごろは互に其家庭に往復するやうにもなれば、我儘を言ふやうにもなつて、まづ同志相互の親情は相通ふやうになつて來た、之が中々の仕事であつた、それは數百年間に亘る相互の狭量のそれが、一年の間に洗ひ清められたのである、人は道を思ふ志士の徒は、私人の感情に制せらるゝやうでは駄目だ、いさ少しく日蓮的氣宇を發揮して具體的に活劇を演つたらよいと云ふものもあるが、そんなことは道の爲の故に動いて居る吾等には、日蓮と云ふ聲を聞いた時から心得て居るので、餘計なる心配は眞平御免だ、吾等は抱負と識見を持つて居る、而して熱烈天を衝く底の意氣がある、今に見よ、時運一たび到らば一代の風雲を捲き起して具體的に天下を震動せしむるであらう(白碧生)

人間自體の面目より考へれば、眞に羞恨慚愧に堪へざる次第ではないか、吾人は情けて横着して胡魔化して一生を送るべきために、値へ難き生をうけて居るのではない、食うがために生きて居るのではなく、放逸なる生活をなすべく生れたのではない、吾人は少なくとも久遠以來の迷夢を醒まして覺者たるの大道を活歩し、而して大に團體の共同福利を計るがために努力すべき天分を以て、今こゝに宇宙の一員として生存を遂げて居るのではないか、さらば堅實なる道念を養ふて高等なる生活に進まずしては、吾が生の本義が立たないことになる、どうしても勇猛の氣宇を振つて活動の努力を積んで行かなければならぬ、この尊とき人生を欲求の奴隷として犠牲にするものあらば、そは既に自己存在の意義を無みするもので、深く内省一番を要する、法華經に云はずや

心常懷懈怠、貪着於名利、求名利無厭、

と言ふて居るが、自己生存の欲求のみを充たさんとするの念強く、一片皎々の道心を缺いて居るものは、方

價品の所謂

堅着於五欲、痴愛、故生煩惱、
と云ふ聲誠に當りて堂々の理路を辿ることが出来ない
のである、

凡夫淺識、深着五欲、聞不能解、
の哀れむべき状、況にさまよふて居るので、精神生活
の上に悦びも光りもない、眞に黒暗の生活にある

常無憐憫、恒求善事、利益一切

慈悲、於一切、不生憐憫心、
と云ふ進歩と活躍との意義を含める境涯に至ることが
出来ない、法華經主義は

質直、無偽、志念堅固

であつて勇猛の努力がなくてはならぬ

汝一心精進、當離於放逸、
と序品に載めてあるが、さらに吾人の隋性に鐵鞭を加
へて涌出品に云く

汝等當共一心、被三精進、鏡發堅固、意

と説いて耐忍奮闘の不抜の信念を教へて居る、又分別

(一) 現實の人生を尊重する教義なる事

(二) 倫理と調和する教義なる事

(三) 團體の存立を尊重する教義なる事

と云ふ三點であるが、宗教が人生の生活に根本的關係
を有つて、且つ廣く深く影響を與ふることは、既に當
然の結論として一點の誤りがない、而らば日蓮主義は
如何、日蓮主義は正にこの三個の大條件を具へて、日
蓮上人を適ふして人文史上に陸離たる光彩を添へて居
る、

一日蓮主義は現實の人生を尊重する教義なる事

日蓮主義は現實の人生を夢か幻の如く輕視して、未來
觀念に沈れたる厭世悲觀の主義でない、また高遠なる
理想を飲いて現實の一面のみに醉ふものでもない、即ち
單なる現實主義でないと同時に單なる未來主義ではな
い、一面人生の缺陷を看破し去りて高遠なる理想を認
め、この理想より立遠つて之を活現し得る事實の壇上
が人生なることの意義を與へ、永久と人生とを調和し
結合せしめたる現實主義である、法華經には

功德品には

忍辱、無嗔、志念堅固、精進勇猛、攝諸善法、
の聖句ありて生々の意氣と活動の力を發揮すべきを示
されて居るのであるが、法華經は消極守舊の主張で
はない、正に積極進取の生面を開いて現に生ける人生
を救済するの大道である、人の内的方面に歡喜の精氣
を賦與して充全せる生活を送らしむるもので、個人の
平安向上を期するは本來の特質には相違ないが、さら
に一面にはこの團體生活の上に、宗教的意義を以て莊
嚴美化するの理想を有するもの、豈に實に個人の慰安
を與ふるのみであらうか、いやしくも教として存立す
る以上、團體生活の發達を期望せざるものはない、假
し既成宗教の中に國家の存立を尊重せざるもの二三あ
りと云つても、之を以て宗教全體を評論し去らんとす
るは淺識者の見なるのみ、豈に一顧の價あらんやであ
る、近來學者の宗教に對する意見を綜合するに、三大
要素を具ふる宗教は團體生活の上に必要缺くべからざ
るものであると云つて居る

我深敬汝等、不敬、慢、
と説いて人生尊重の意義を明かにし、進んで吾人の生
活と信仰との調和を誨へて生活の本義に及び

資生產業皆順正法

と云ひ、その現實尊重の大精神が法華を信するもの、
思想に醞酵し來りて、終に日蓮上人の活動を生むに至
つたのである、

命と申すは一身第一の珍寶也一日なりともこれを

のぶるは千萬兩の金にもすぎたり

あゝこの警訓、いかに深大なる教訓の内含せるかを窺
ふに足る、上人が斯くまてに生命の貴とを語るは即
ち現實人生の價値を認められて居つたからである、

極樂百年の修行は穢土一日の功德に及ばず

と喝破し、彼の厭世主義の徒がこの現實の人生を輕視
して極樂往生を勤め、徐ろに善根を積みよなどの主
張に對して大痛棒を加へ、この人生の上に於て奮闘力
の生活を遂げて、一日正善を行ふの徳勝れたりと誠
めたるは、眞に現實の人生を尊重する一大教義ではな

いか、ことに上人の慘風悲雨の一代はみな悉く人生のための活動であつた

(二) 日蓮主義は倫理と調和する教義なる事

倫理と宗教との關係は極めて重大なる問題で學者の論議する所であるが、其結論は果して如何なる解決を得べきものであるか、倫理は相對界に於ける人間の行為基準を示すもので、宗教は絕對の靈格に無限の信頼を捧ぐるものであるから、其立脚は全然同一ではないけれども、倫理自體の根底には、必ずや吾人の本性を開発すること、無限の靈力に結び付くべき性と天道とを斥けることは出来ない、どうしても人間相互の關係を超越したる不朽の權威を要求すべき本質であつて、そうでなくば倫理の根底は立たない、また宗教に於ては絕對の靈格を信頼するの外、この信仰をうつして以て倫理の實行に力と與ふるものである、たゞ絕對界の一面に馳せて倫理を無みするものでない、信仰と倫理と其適當なる調和を保つて世善を進めて行くものであつて、日蓮主義はこの兩者の關係を圓滿に發揮せるもの

宮仕を法華經と思召せ

と熱烈なる信徒四條金吾に教へたのは即ち其意義である

世間の爲にも佛法の爲にもよかりけりと囁むべし之れ正しく倫理と宗教との二面生活を調和し來りて、何れにも偏せず共に圓滿なる生活を遂ぐべきを教へられたので、宗教的大信仰と合致したる落付きのある倫理的な生活である、道を行ひ法に生きたる生活そのものである、また宗教に慈悲を説き倫理に博愛を唱ふ、其文字は異つて居るが而かも理義に於ては同一である、共に是れ人生の向上と幸福とを増進するにある、宗教の強き力は倫理的博愛を實行せしむるので、根本的に信仰と倫理との調和を示して居る、

(三) 日蓮主義は團體の存立を尊重する教義なる事

吾人は宇宙の一員である、それと同時に國家の一員である、國家の一員として共同生活を營んで居る以上、國家の存立を尊重せなければならぬ、其國の民として建國の理想を體し其發展に努力すべきは當然の責務で

である、法華經には

諸法住法位世間相常住

と説いて萬有實在の意義を明かにし、不滅生々活動の原理を示して居るが、この萬有の實相を解釋するの所以は、即ち充全せる人生を意識せしめんと欲するにあるので、倫理の根底を明確にする上に最も尊ぶべき教義である、而して吾人はこの實在の實相に立つて、不滅の活動を爲すべきである、大向上性を存する、佛性を有つて居る、この大向上性は倫理上の實行力を與へるので、法華經には

若し人善觀心ヲ如レハ是レ諸ノ衆生ノ皆己ニ成セン佛道ナ

とあるが、善觀の心と云ふは倫理的の善徳を指すのであつて、この倫理上の行為徳行が、直ちに大向上の力となり、人生終局の大目的に達する力となり、其根底に於て契合する所がある、又必ず調和一致すべき筈のものである、されば宗教上の絕對信仰が相對界の人生と密接の關係を有つて、倫理的の模範者となるべきものである、日蓮上人が

ある、ことに我國民はこの崇高尊嚴なる國家に對し、無二の忠誠を捧げて建國の天業を翼賛し、大理想の實現に向つて共同鞠躬せなければならぬ、世界に國と稱する國は數多けれども、無窮の大生命を有つて天業を恢弘すべき尊嚴なる國家は、他に其比を認むることが出来ない、日蓮上人はこの日本國に生れたるを無上の光榮なりと感じ、大多數の思想家政治家が未だ曾て氣付かざる國家問題を提げて起つたのである、上人の卓越せる識見に聽かば、日本國は宇内に對立せる國と云ふ國でない、天下を光宅すべき大聖業の下に神の建てたる國であつて

此國は神國也

と言ひ、世界統一の「知見」の大秘密の大神通あるを述べて、萬古に光りある高邁なる確信を披瀝して云く
八萬の國にも超へたる國ぞかし

と論道せられて居る、されば上人が絕對の權威を以て人心の靈府を衝き、其先天内包の佛性を開發せしむると共に、一面にはつねに國運の發展を當面の重大問題

として滿腔の熱血を瀉へたのである、
知法思國の誠忠

とは上人の一代を貫ぬける思想の表象であつて、國家の存立を敬重するの觀念こゝに凝りて、立正安國の大義を絶叫せられたのである

夫レ國ハ依レ法ニ昌

之れ立正安國論に發表せられたる大精神である、豈に萬古不磨の真理ではないか、上人は國家の理想を實現するに於て道の尊重すべきを説き、其道の正邪を撰擇すべき所以を示さる

彼の國に好かりし法なれば此國にも好かるべしと思ふべからず

この國を思ふがために周到なる警告を與へたる所、眞に敬仰に堪へざる所ではないか、また國民道德の眞髓を説くに當り

孝子慈父の王敵となれば父を捨て、王に參るは孝の至りなり

と極論して大義名分を裁斷する所、蓋し是れ古今獨歩

宗教上の所感

(七月廿五日統一閣に於ける天晴可別會講演の大意にして譯者の校閲を經ざれば文責記者に在り 白碧生)

法學博士 浮田和民

宗教は宇宙及人生の價値を自覺し自信するの道である、而して其本體は萬有及人間の實際生活でありまして、經典其ものでない、經典は其翻譯書である、經典の中には其譯者又は時代の思想がある、論語でも全體が孔子の語とは思はれぬ、佛敎でも悉く釋迦直傳の語のみ記されたものとは考へられぬ、經典の中には多少の矛盾がある、凡そ本體と云ふものは、四書にも五經にもない、亦聖書にもない、天地萬有自身が本體である、本體が即ち實在である、今實在と云ふのは事實と云ふと同じ意味で、事實は天地萬有と吾人の實生活である、吾人は萬有の一分である、而して萬有の實在なるを考ふるに、空間的に無窮無極である、究極する所

の大體見ではないか、斯の如く上人の信仰より突發したる主張抱負は、堂々乎として公正なるものである、日蓮主義は現代の學者が唱ふる要件の全部を包含し、一點の缺くる所なき大敎義であることを認める、然らば即ち日蓮主義は、時代を啓導し人心を訓練する大道なりと謂はざるを得ない、而してこの大主義は日蓮上人の身に當りて實行せられたるもの、冷灰なる理道でない、上人が迫害場裡に力戰奮闘を打ち續けて天下を風化せしめたるは、這般の生ける信仰の力である
日蓮其身にあひあたりて大兵を起して二十餘年、日蓮一度も退く心なし
豈に意氣壯烈天を衝く底の大字ではないか、即ちこゝに活動の源泉溢れ、人生の事何事か成らざるものやある、あゝ主義なくして心に悩みをいだいて生活するものこの靈光に觸れよ、而して其現在及將來の生活に根底と意義とを與へよ

上下四方の區域のないのが宇宙の實在で、宇宙の端は考へ得られぬ、不可思議なる世界に立つて居る、而して又時間の上では過去將來を通じて一直線である、過去を調べても止まる所なく、始めのないのが現在の世界である、勢力は盡きるものでない、依て將來も終局あるものでない、此中間に生死して居るのが人間である、眞に不可思議である、此不可思議に就て自覺を得るは理性ある人間の特權である、實在せる世界を自分の心で意識し、自分の品性に實現し、自分の活動に推し及ぼすときは自から宗教的感情、品性活動になりはせぬか、之を現在の科學の原則より云ふも、無始無終の點に到着して居る、皮相の見ては相容るべからず

るもの、操てはあるが、科學の假定する所は、無より有を生ぜず、有は無に歸するを得ずと云ふのが大原則である、釋尊の説かれた因果律は即ちそれである、この因果律を基礎として少くも例外があると科學の根據は破壊される、科學の根本思想は因果律にて支配せられる、近世の科學は物質無盡性を根本に置いて居る、勢力不滅説である、物質に表はるゝ力は不滅である、之は科學の力で證明するを得ざるも、之を假定せざれば科學の講究は出来ない、例へば建築物が炎焼にかゝつて灰になつても、其分子と云ふものは寸毫の消滅はない、宇宙全體に就ては證明し實驗し兼ねる所がある、けれども萬有は實在である、斯かる實在より信仰の本體を考へると、經典の或部分と或ものとを調和せしむるは困難ではあるが、信仰の實際に於て歸一するは容易であると思ふ。

萬有の本體天地の心は、善であるか惡であるか、是れ古今人生の大問題であるが、人間社會の全體より觀察すると矛盾の相がある、一面は慈悲の活動を存すると思ふ、根底に善がある、理性の上より分析は出来ないが、人間の立場は善である、此の信仰思想を置かなくては生活は出来ないかと考へる、吾人は大人格者の意識を通ふし、又大人格者と同化することによりて知ることを得るのである。

教育の成功政治の目的を遂ぐるには、教育政治のみにて其理想を實現することは出来ない、宗教と一致和合せなければならぬ、政治家の心底には偉大なる理想信仰がなくては政治上の改善は六ヶしい、教育者も其教育上に確固たる希望がなければ功果は擧げない、之れだけでは宗教上の信仰と云へぬが、宇宙の根本を善と悟る時に眞の信仰及希望を生ずる、普通の人には萬有の根本は分らぬと云ふが、宗教は人格者の意識に同化せられて善に歸すると確信し、之に依りて努力する所に宗教がある、此の信仰を持つて居らないで、人を導き政治を完成しようとするは大なる間違が生ずる、人間萬事此信仰に基かざるものはない、然るに教育のみに因りて凡ての人を教化し得べしと思ふは其當を得

が、一面には無慈悲の相がある、即ち洪水暴風噴火と云ふ工合に人間社會を害する、又一方は富豪に生れて居るが一方は貧民の子に生れて居る、自分が貧窮でなければ樂天的であらうが、貧民窟に生れては天道是非かの嘆息を漏らすも無理からぬことで無慈悲の様に思はれる、而し天地を惡と云ふことは出来ない、世界の實相を見ると美はしい處がある、春風胎薄櫻花芳香を放つて天地笑ふときは、現在の事實に極樂の儚がある、貧富共同して樂しむことが出来る、又生成の原則より考へると、物を生ずる仁愛心がある、鳥獸の類にも子を愛し弱者を救ふ事實があつて、人間の道徳に似た様なことを行ふ、人間社會を外にして殘酷無慈悲とばかりは言へない、不道徳の人を畜生と言ふが畜生の中にも一種の美はしい風が認められる、況んや人間は正義の爲に犠牲になる、釋尊が難行苦行して人の爲に活動し、耶蘇は十字架に上りて人の惡を償ふた、こう云ふことが事實ある、實在である、この事を半面に見て綜合して考へると、萬有の根本は善であると歸着す

たものでない、西洋でも學校教育のみに依りて之を爲し得べしと信じたのは、佛國にて十九世紀の初年であつた、當時國中の犯罪者が百分の三十九は教育あるもので他は無教育者であつたので、教育さへすれば犯罪は減ずると云ふ考察から義務教育を行ふた、而し十九世紀の後半無教育者は百分の三十の比例になつたが、其全体の數は少しも減じない、唯だ數の比例が顛倒しただけであつた、又政治の上には立憲政治である、立憲政治は特に人民の善に進み得ることを假定し又理想となすものである、故に政治の目的を完全に行ふ様にするには、政治家と人民との間に同情感化さるゝ所のものがなくてはならぬ、今日でも犯罪人は殖える、政治の改善だけでは充分でないことは明かである、現代は黄金萬能を叫んで居るものもあれば、富の分配を平等にするに云ふ問題も盛んである、之れとても人間は食物の供給によりて肉体の安樂だけで、それで全部の満足を得たものとは謂はれない、富は極樂にして貧是地獄と云ふ譯でない、この自覺がなければ富でも何に

もならない、どうしても宗教を要するので、教育及び政治の根本たる信仰希望の淵源爰に存するのである。

元來人間の信仰には二つの信仰を要するので、一人は人に對する信仰にして自己と他人に對するもの、人間の天性を善と見る、實は悪人もあるが根底には善がある、故に貧民の家庭に在りて墮落的傾向にあるも親を愛する、亦自己を愛する、此の心は慈悲である、之を従へて導かば救済の見込がある、經濟の結論では救はれぬ、二は天地萬有に對する信仰である、天地は一面無情のやうであるが一面には慈悲仁愛の相を表はして居る、釋尊の如き聖者を生ずるのは慈悲である、釋尊の人格を道ふして善なることを知る、始めて萬有科學の研究に無限の努力を爲すことが出来る、斯くすれば萬有の法則を國家人生の上に實現する希望が現はれる、そこに道德がある、道德は宗教の信仰を缺いては成立たぬ、眞の尊敬眞の謙遜は宗教心の發現である、宗教心なければ平等に謙遜することが出来ない、宗教心のないものは、權門富貴學者の前には卑下するも權力なきものには驕ぶるが、宇宙の無窮無限なるを自覺すると學者も無學者も凡て同じである、無限の前に立

てば眞の謙遜が出来る、宗教の根據に立てばさうである、又敬愛と云ふ事も宗教心なくんば出て來ぬ、如何なる人に對しても敬と愛とを以て接するのは、人間各々の内に尊いものがあることを自覺せなければ湧いて來ない、夫婦の關係親子の關係さうである、孝養は無限の情と愛とを以て親に仕ふることであるが、如何なる茅屋の中に在りても本心を以て事ふる、此の萬物萬人に對する謙遜敬愛は宗教に在る、一種の宗教的信仰に歸着する、天地萬有の根本の善の發現である、故に近世科學の傾向は佛敎と一致しつゝあるものと思はる、物質の原理と人の本質とは絶對的に懸隔のあるやうに見ない、其間に聯絡させることが出来る、一貫したる勢力生命を歸一せしむる事になつて居る、科學と宗教とは矛盾せぬ、科學の進歩は宗教の本体を發揮するものと考へる、佛敎は耶蘇敎に先だつて宇宙に法則あるを知り且つ慈悲の活動を囑んで居るから、佛敎の眞理を信するもの多ければ、陸續として科學上の發明も出て來るべきである、こゝに於てか宗教心復興の急を叫ばざるを得ざる次第である、以上宗教上の所感の一部を述べたに過ぎませぬ。



活動史

東京

聖語に「我門家は夜は限りを断じ晝は暇を止めて之を案ぜよ」との教誡があるいかに堪へ難い炎熱のうちにあつても吾が天分を怠るやうの事ありてはならぬ人には情け現性が付き易いさればにや偉人の意氣に感憤して歡喜の生活を送ることが大事なのでいや苦しいなどと言ふのが御も墮落する原因であるから注意を要する譯であるこの年の夏の都は講演を續行して教益を有して居る世には熱心に道を求むるものがある此熱いのにも平氣で三時間の講説を聞いて居る

▲七月六日午後二時地明會を開く笹川權僧正は味中の上味を得よ信仰によりて法悦の境涯を作るべしと懇説し五島子爵は淨徳夫人に就て本誌に掲げた有益の講話を爲し多數の聽者に甚大の感化を興ふるものがあつた

▲十六日午後二時職工徒勞勞働者のために慰安會を開いた何がして餘興があるのかさしに廣き會場も眞實の盛況を呈した田邊南雄氏の水戸烈公の講談梅家小さんの滑稽落語に次いで少年組の勇壯なる劍舞などありて感興を惹き田中會居士の佛敎神聖の意義に就て平易に實例を引いて自覺を促がすものがあつた

▲參集者は白しく意味ある一日を送つたこと

を感奮して散會したのは午後五時過ぎであつた

▲二十日の日曜講演定期に開催京師師の説示があつて鈴木日曜師は處世の要義と信仰の妙致とを語り野口僧正は日蓮主義の廣大深遠なる包容主義を論明して國家風教の確立に及び多大の感奮を興ふるものがあつた

▲二十七日例會講演の日暮さ烈しかったが聽衆の數多かつたのは奇妙な現象であつた三上師は宗教が個人に安慰を興ふべきは勿論だが團體生活に對するものでなければならぬと云ふ本誌に掲載したる講演を試み井村師は佛敎は主師親の三徳を具ふる完全なる覺者であつて救済の慈願を垂れて常に活動せる所以を説き示された即ち法益があつたことと思ふ

▲七月は盆會の月であるさればこの機會を利用して各寺院に講演を聞くことにした寺の數は僅かに二十餘ヶ寺ではあるが残りず講演を設けて法の功徳を語り道場の意義を一分なりとも現はしたのは心地よいことであつた

▲八月三日例會講演士用最中の暑さとして聽衆少しかと氣遣つたが道を求むる士女の熱誠は少しも恐るゝ氣合なく木村義明師が人生活動の法則を述べ信仰の義を明かし山根日東師は生活の種類を詳説して充實せる内の生活と法の悦びによる生活を取るべしと信仰を勧め熱せる心頭を冷やすべき水の如く多大の價直があつたと信ずる

▲止眼師の教訓を奉ぜる青年教徒はこの暑さの休みを利用して柱一間樓上に講習會を開いた有志の發起であるので聴く人は少ないが

京都教報

井村師の本抄の講義聽講者同日抄論議の研鑽を積み七月廿六日より八月三日に至る間熱心に能く修養に勵んだのは日蓮主義啓蒙の時代に於て大に喜ぶべき聖業である

▲七月十三日都を出發して北海道巡教の途に就きたる本多大僧正は爾來北海道人中先導にて各縣隊に於て調話を試みて士氣を振興せしめ劇場會社寺院に公開講演を催して日蓮主義の靈氣を鼓吹し全道の思想界を一新するの効果を興ふるものがあつて其講演は北海タイムス新聞に掲げられ感化の甚大なる近き將來に於て何等が具體的現象を見ることである

▲七月一日「午後二時妙滿寺に國語會を修し石井寛俊師は信仰の本義を説きて妙力の作用を述べ「六日」宛初日妙標寺に聖祖門下同志會の例會を開き川崎英師は説言菩薩虎之助氏の信傳論を授へて佛敎に云ふ佛性論の一部なるを評説し宗教の成立は超人觀の存立する所に宗教ありと論じ「七日」夜妙滿寺に天晴會の例會を開き野日主師は眞神道と日本佛敎と題し我國建國の事實及理想より説き起し基督敎の神は理の神也空の神也我天照大神は事實の神也神道は即ち事實の道なりと論じ天皇は神人合一の御方にして天子となりて眞に意味深きなりと結び日蓮主義の神道觀を述べたり「十三日」妙滿寺に明治天皇御來侍會を修し野老乾爲師の下に莊嚴なる音楽法要を修し終つて大阪親木布敎師王佛冥合に就て我建國

の理想と日蓮聖人の國家觀を評説して先帝陛下の御菩提に資す。十五日、夜二本壽堂寺に例會を開く。石井真使師日蓮聖人の生涯を詳説して其一事一動萬人の師表となるべしと説き金光右教師は早に傳教と云ふも數多く其是非に迷ひ善惡を知らず紛々とも傳教の眞實義は法華經を通じて日蓮主義にのみ見るべしと説く。十八日、夜妙滿寺講堂に例會演説會を催す。石井真使師は我國古來よりの特點を擧げて佛敎との關係を説き金光右教師の出現は偶然にあらざり正しく一切衆生の二世救済を目的とせる所以を説き野老僧正は先帝の諒明正に明けんとす國民須らく陛下の御心に添はざるべからずとて「ならび行く人」にはよしや彼るとも正しき道を歩みながえぞの御製を發端として「道」を詳論し國民として踏むべき道は正しく根柢を信仰に置かざるべからず是れ大聖人の主張なりとて多大の感動を興えたり。廿八日、妙滿寺開山報恩會を修し金光右教師恩抄の一節に就て説教せり。卅日、は先帝陛下御登進滿一年祭につき川本立寺は多年奉養を受ける法堂を修せり。川本立寺は多年教化の潤を受けず堂宇非常に荒廢したりしに今回金光右教師法務を擔任し五百餘圓を投じて修繕を完成し七月九日先住北村師の盛大なる一周年法要を修し爾後婦人會等を設立し盛んに教運を振るべしと云ふ其發願書には同寺檀家總代小林吉氏及び小林長之助氏等多大の盡力を爲しつゝありと云ふ願はくば常無懈絶の心地に住してさらに大に道の爲に力をいされよ。

『二十日堺市妙滿寺に於て明治天皇一周年奉徳會を爲し午後七時、演會を開き高木師は現未開節せる日蓮主義を説き川崎師は人の意義より信仰の必要を論じて感動を興へ。廿一日、夜間研究會を開く川崎師我國の現在及將來の宗教に就て個人性格の宗教を論じ更らに大同より纏縛せらるゝと云ふ。

岡山教報

美作吉田教育會に於ては岡山より能仁僧正を招待し七月一日より二十一日に至る迄風教上の講演を開催したるが至る所非常の盛會であつた。
七月二日津山町弘通所に講演開催
根本的大自覺 能仁一十師
日蓮上人の信仰 能仁一十師
女性の地位と修養 能仁一十師
宗院に於ける婦人の力 能仁一十師
津山の瓜生原及び根保の地に通俗教育講演を開き能仁一十師の地方改良に於ける一人の力に就て有益なる指導を興へた。
『二十一日津山弘通所に日蓮主義の講演開催
根本道徳の本在 松尾 鼓城君
嗚呼！ロタスの道 能仁 一十師
日蓮上人の基礎教義 能仁 一十師
次で津山本蓮寺に於て追悼會を講演を開催したるが夢々甚だ多かりき
法華經と相照すべき日本國 松尾 鼓城君
御製に類はれたる修養の基礎能仁一十師の熱心なる講説に無限の法悦を得て何れも一説

の信念を増進するの力ありたりと云ふ
福井
『七月十六日午後七時福井市妙經寺に開催し定例に従ひ實前に法味を捧げ智田聖道師の内、外相應の妙法に就て信仰の妙力を教へ清せる思想に感應の靈水を灌ぎ復活の氣運を興ふるものがあつた。
下總布教の記 夏目智誓記
下總の小馬子ヶ原は昔は曠花たる原野であつたが今は移住者のために開墾せられて居る。而し此地の人は道を聴くべき機会がない。追て教を傳へることにした。このたびはこの附近の數田を開拓し培養をなすべく七月二十三日より追教を始めた。廿二日午後一時千葉郡上泉寶泉寺に開催村吏員青年會員の參聽者百餘名
開會の辭 夏目 智誓
精神修養 海老澤乾樹
日蓮上人の教義 萩原布教師
熱誠よく聽衆の感動を惹き閉會後も所感を交はして居るのを認めたり。
『廿三日印旛郡小谷流永福寺に向ふ海老澤師及川上村青年團員の出迎を受け歸りながら青年團の蔬菜試作園を賞視して正午永福寺に着し寶前に法味を捧げた。後講演
開會の辭 海老澤乾樹
精神修養の一端 夏目布教師
日蓮主義の本領 萩原布教師
聽講者其態度最も眞面目なるが青年團は海老

澤師指導の下に修養に實地に他の傳統として推賞するに足る。同日午後七時、青年團主催にて修徳講話を開く。
開會の辭 海老澤乾樹
日蓮上人と風紀改善 夏目布教師
日蓮主義と社會活動 萩原布教師
講話の如く各方面より詳々切々趣味ある講演をなし閉會後茶話會を開きて所感を交はしぬ。
『廿四日、同郡砂本源寺に於て開催
開會の辭 小澤 盛重
日蓮上人の人格 夏目布教師
吾人の自覺 萩原布教師
聽衆は村内重立多數にて示教の手筈あつた。
『廿五日、千葉郡富田正福寺に開催
開會の辭 日暮 支待
日蓮上人の靈光 夏目布教師
永久不滅の信 萩原布教師
岡地は日宗各派の檀信徒ありて多少競争の傾きあるもこの講演によりてよく信仰の神妙に觸れ歡喜のうちに散會を告げ歸りて小馬子ヶ原方面の追教を待へぬ人は教田荒れたりと云ふも能はずしてつねに教を傳へば外護の信士も生れることであらう以てこの記を終る。

統一團寄附金人名報告

- (八月一日迄)
金五拾錢 太正二、三、七橋本ふみ 六殿
金五拾錢 大正二、二、六小倉佐一郎殿
金拾圓也 佐藤四方江殿
佐藤 鏡 殿

金七拾錢 大正二、一、七蜂屋 みす殿
貳圓九拾錢 大正二、三、一七山根 日東殿
金五拾錢 大正二、三、一七山根 コウ殿
金壹圓 大正二、八、一九野口 夏江殿

偉人日隆

この書は日蓮上人の主張を論じたるもの、日蓮主義者の研究資料たるもの也
發行所 淺草馬道町一ノ二八 大獅子吼會
定價金貳拾錢
小包税金八錢

謹告

小生僕爾今左記の地に住し其庶務に従事致居候間此段謹告候也
京都二條寺町妙滿寺中

佛教と修養

本書は施本用として編纂したるもの、暑中の贈答品としては尤も適當のもの、舊盆會にて祖先の菩提のため知己に頒つは尤も妙、ことに表紙裏に法號を記入せば功德も多かるべし

〔内容〕 本多大僧正、小原陸軍少將、三上記者の講演也

▲八月十五日發行
▲一部郵税共金五錢
▲十部より百部迄郵税共一部三錢の割
▲百部より五百部迄郵税共一部二錢の割

勤行作法

文學博士姉崎正治君
大僧正本多日生師編
(第四版發行)

●一部代金五錢十部以上一割引
●郵税四部毎に金二錢

聖語錄

研究者も布教家も共に座右に供ふべき聖典也

●洋裝 九百頁
●特製金一圓三十錢
●上製金八十五錢
●郵税 金八錢

前机・幢幡
大販賣
御來店の節は陳列場へ御來車被下度はれ迄とは一層勉強仕各宗の佛具一切陳列仕置候



正價 三法堂佛具發賣目錄

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價目録書を作製致し候に付御入用の御覽あれば、郵券四錢御送附被下候は、通過進呈仕候。此の目録を左の通り、お買物安價にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は

●佛具一切 過去帳の類 ●大般若經 一切經 理趣分 位牌 ●太鼓
●佛具金物 一切 釣鐘 ●三鐘 ●木魚 ●曲篋 ●香珠 ●大念珠 ●扇
●子 ●中 ●容 ●雲 ●洞 ●銅 ●金 ●權 ●形 ●水 ●引 ●打 ●盤 ●和 ●機 ●唐 ●檠 ●人 ●天 ●蓋 ●懸 ●盤 ●樂 ●器 ●類 ●大 ●會 ●三 ●寶 ●鐺 ●並 ●に ●平 ●輪 ●扇 ●形 ●水 ●引 ●打 ●盤 ●和 ●機 ●唐 ●檠 ●人 ●天 ●蓋 ●懸 ●盤 ●樂 ●器 ●類 ●大 ●會 ●板 ●御 ●送 ●物 ●並 ●に ●高 ●麗 ●製 ●裝 ●文 ●庫 ●獻 ●茶 ●湯 ●器 ●獻 ●菓子 ●臺 ●行 ●鉢 ●量 ●器 ●白 ●鉢 ●水 ●御 ●買 ●物 ●坐 ●な ●が ●ら ●自 ●由 ●自 ●在

●佛具卸部 京都市三條 本舖 三法堂藤田總次
通小橋西入

●小賣部 同 市三條 振替貯 大坂(四二五九)
通大橋西入 三法堂佛具陳列場 金香號 東京(二〇七一)

大僧正本多日生師編

橘香集

本書は法華經の要文と日蓮上人の遺文中より警句教訓を抄録したるものにして内容に於て發心教相佛陀人身法界本尊行法得益警策の諸篇に分類して研究引文を要する場合は尤も至便にして日蓮主義鑽仰者の供ふべき珍書也今回特に施本用として並製を發行したれば至急申込されたし

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ年金七拾八錢 代金ハ振替貯金口座東京一二一九番へ持込マレタシ此場合ニハ送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

大正二年八月十五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日華

東京市淺草區北清島町十四番地

發行所 統一團

東京市淺草區北清島町十四番地

統一團

(京東座口替振) 九一二一

文學博士 三宅雄次郎 君序
大僧正 本多 日 生 師 著

(再版四月廿八日發行)

法華經講義

洋裝全二冊貳千頁
正 價 金 四 圓
特 價 金 參 圓
内地郵税金貳拾錢
臺灣韓八百匁迄の小包料

目 次

◎序說 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
◎第一節三種教相の網格 ◎第二節十雙權實の巧釋 ◎第三節六重本迹の法華經觀 ◎第四節三法々轉の
◎教相の節節待絶二妙の解釋 ◎第六節一念三千の妙觀 ◎第五節日蓮の法華經觀 ◎第一節本化別頭
◎圓善の活釋 ◎第六節十當義の眞義 ◎第七節第十一節唯一本尊の光顯 ◎第八節佛界緣起の妙旨 ◎第五節究竟
◎兩善一貫の活論 ◎第五節重玄當義の妙解 ◎第三節日蓮上人の學風 ◎第二節本化獨特の五玄 ●第八章妙法華傳
◎釋の概略 ◎第七章日蓮講經の要義 ◎第一節日蓮上人の學風 ◎第二節本化獨特の五玄 ●第八章妙法華傳
◎譯文 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ◎通解 ◎妙解 ◎異解 ◎批判 ◎質議 ◎解決 ◎字義 ◎
◎參考 ●讚唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身
觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らん
と欲せば必ず法華經に來るべき也
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義
を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所

東京淺草北清島町
振替東京一三一九

統 一 團

日本の御國躰と佛教

大僧正 本 多 日 生

統 一

(號三拾二百二第)

信仰なき生活は危険也

釋尊の修養と現代の文明

僧 正 野 口 日 主

佐渡に於ける日蓮上人の

外護者に就て

活宗教主幹 小笠原毅堂

新らしき婦人に與ふ

三上義 徹

日本佛教徒に望む

ダ ル マ、バ ー ー